

第5章

防止に向けた取組 若い女性を対象に

片岡 麻里

1 はじめに

100年にわたり少女と若い女性のエンパワーメントに取り組んできたガールスカウトの、ジェンダーに基づく暴力の防止に向けた若い年代の女性（少女）を対象とした取組の実践を報告する。

2 なぜガールスカウトが取り組むのか

少女たちの声に応えて

ガールスカウトは、少女と若い女性が、世界市民として自らの可能性を最大限に発揮できるようにすることを目的として、世界150の国と地域で活動を展開している。世界組織は、ガールガイド・ガールスカウト世界連盟（以下、WAGGGS（読み方：ワググス））で、世界中の少女たちの声を代弁し、少女たちにエンパワーメントの機会を提供する運動を展開しており、世界中で1,000万人が、日本では4万人が活動に参加している。

ミレニアム開発目標への取組が世界で進む中、WAGGGSは2008年から、「少女一人ひとりが、ミレニアム開発目標を達成するために自分たちができることに取り組むことにより解決に近づく」と世界中の少女たちに自分にできる

ことに取り組むよう促していた。そのことを進める中でWAGGGSは、少女たちに「何があなたたちの幸せを阻んでいて、どんな問題に取組たいか」と尋ねた。そうしたところ、「少女や女性に対する暴力」という声が多くあったため、この問題に取り組むことを決め、2011年7月に「Stop the Violence Campaign – Speak out for girls rights 少女に対する暴力をなくすキャンペーン—少女の権利を求めて声をあげる」という世界的なキャンペーンを開始することを宣言した。

チェンジェージェントとなりうる少女の可能性を最大限に

少女と女性のための運動であるガールスカウトが、このキャンペーンに取り組む理由は、少女が学び、力をつけることで、自身の未来を切り拓き、地域、さらには地球規模での変化を導き、社会を動かす力となる人材になり、そのことがこの社会に変化をもたらすための鍵だと考えているからだ。また、少女・女性に対する暴力は世界共通の問題で、少女が「変化を起こそうとしている地域」に生活している他の少女や若い女性、その少女の家族、友達にも起こっている問題であり、それは、誰にとっても決して他人事ではないからだ。そして、差別と暴力をなくすには、教育、特にノンフォーマル教育が不可欠で、ガールスカウトというノンフォーマル教育を通して、少女や若い女性が自分の権利を理解して行使する力をつけ、変化を起こす強い力を生み出すことができるからである。また、ジェンダーによる固定観念や不平等など差別や暴力が起こる根本原因の解決や、少年や若い男性への働きかけも同時に行うことのできる存在であると認識しているからである。

Stop the Violence Campaignの取組

このキャンペーンは、次の要素で展開している。「意識改革のためのグローバルキャンペーン」「教育プログラム」「調査研究と提言」「ロビー活動」「国内・地域のキャンペーン」の5つである。

「Voices Against Violence（以下、VAV）プログラム」はこの中の「教育

Ⅱ 実践の展開

プログラム」で、少女が自分自身の権利に気づき、行動を起こすためのスキルと自信を高めることを目的にしている。このプログラムは、UN WomenとWAGGGSの共同開発のプログラムであり、世界中で少女や若い女性を脅かしている様々な差別や暴力について知り、暴力から自分や友達を救う方法を、仲間との活動を通して学ぶことができる。日本でも、2014年12月にインドで行われたトレーニングに指導者を派遣し、国内でのプログラム提供のために2015年度から本格的に指導者育成に取り組始めた。本稿では、このプログラムの紹介と取組の報告と合わせ、2011年から日本のガールスカウトとして取り組んできた内容について報告する。

3 日本での取組の始まり

2011年7月、世界で「少女と女性に対する暴力をなくすキャンペーン」に取り組もうという宣言を受け、日本においては、中・高生及び大学生たちにもっとも身近である問題に取り組む必要があると考えた。その結果、もちろん「いじめ」なども非常に重要なテーマであるが、デートDVへの取組を進めることを決定した。

このことを受け、2012年、20歳代を中心に委員会を構成し、どうすれば、デートDVについて広く伝えることができるかについての協議を始めた。この年は国際ガールズ・デーが制定されてはじめての10月11日を迎える年であり、この日のイベントで同委員会メンバーが、Stop the Violenceキャンペーンへの取組をアピールした。11月には内閣府主催のパープル・ライトアップイベントへ参加。これは、その後ガールスカウト会員に対し行動をすることへの呼びかけにつながった。呼びかけは、ライトアップされている現場に行って写真を撮ろう、またはイベントに参加しようというものであった。現在も各地で紫にライトアップされる建造物と共に撮影された写真の投稿のほか、自治体などと連携して街頭で「女性に対する暴力防止」の呼びかけを行ったりしている。

これらの活動を進めるうちに、デートDVについて学ぶオンラインプログラムを開発することとなった。中学生以上を対象とし、オンラインで動画を視聴しながらワークシートを使って考えるプログラムである。このプログラムに取り組むことで、「デートDV」について知ること、世界中に少女に対する暴力があること、そのために自分たちができることを考えるようになっていく。オンラインプログラムのコンテンツは、委員及び委員の呼びかけに応じた人たちの協力により完成した。2013年から2017年までで1,140人がこのプログラムに取り組んだ。

2013年からは、「マイボイスシートキャンペーン」を開始した。マイボイスシートキャンペーンは、オンラインプログラムでデートDVについて学習し、友達に学んだことを伝えながら、自分の意見をシートに表明し、それを写真に撮り、SNS上に掲載するという取組である。

Know! No! Dating Violence!!と名づけられたこのキャンペーンでは、2013年は「デートDVをなくすために必要なのは?」、2014年は「好きな人とLove Loveな関係でいるために、あなたはどんな愛を大切にしますか…」と問いかけ、メッセージ写真を集めた。2年間

写真1 2013年度の投稿 その1

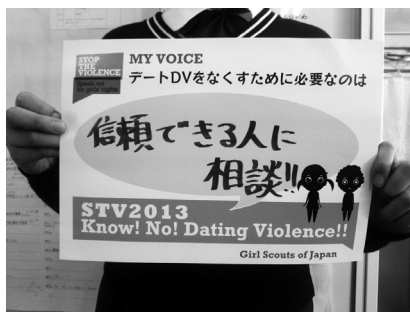


写真2 2013年度の投稿 その2

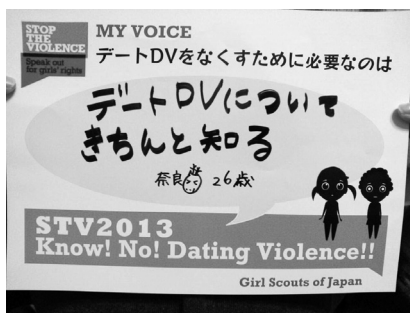
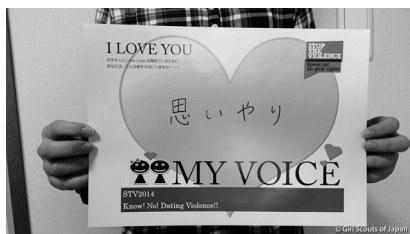


写真3 2014年度の投稿



Ⅱ 実践の展開

で累計5,613人がこの活動に参加した。2013年のマイボイスシートキャンペーンでは、同級生たちに「デートDVについて知ってもらいたい」と、中学生や高校生が自身の通う学校で呼びかけたいと担当の先生に交渉し、デートDVについて伝える場を持ったメンバーもあった。同級生たちからは、「束縛も暴力に当たるとは思っていなかった」などの感想があった。

中・高生たちのこのような活動を支援する大人の存在があったことは想像に難くないが、一方でこの活動を進めるにあたって、大人たちの意識を変革することが重要であると実感している。2013、2014年には約1,500人の成人がデートDVに関する研修を受け、「デートDVはどこか無関係なところで起きているのではなく、身近に存在する可能性があること」あるいは、自身の体験が、実は「暴力」であったことなどに気付いた人が少なくなかった。

同2013年には、同年代（若者）にデートDVを知ってもらうために動画を作成。この動画は、ストーリー創作・出演はやはり若者が中心となり実施、制作にあたっては賛同してくださった協力者の力によって完成した。また、若者に人気のある楽曲を使用することでこの楽曲の検索によって動画に到達する人が増えることを狙った。

これらの活動は、若い女性を対象とした、若い女性たちによって計画された取組であった。これらの活動に触発され、各地で中・高生によるデートDVに関する啓発活動が取り組まれることとなった。同時に、関わる大人たちも、この話題について、意識を向けるきっかけとなった。

4 VAVプログラムとその実践

VAVプログラムとは

<年代に合わせたテーマとプログラム>

これまで100年にわたり、ノンフォーマル教育プログラムを提供してきたガールスカウトは、このプログラムをUN Womenと共同で創り出した。発育・発達がめざましい5歳から25歳を対象としているため、4つの年代グルー

ブに分け、それぞれの発達課題と取り巻く社会環境に合わせたプログラムを提供している。対象年齢を5歳からとしていることは、人生の早い段階で、自らを大切にすること、他の人を大切にすることなどの価値観を学ぶことはこの後の人生に重要な影響を与えるという考えに基づく。

18歳から25歳は、日本では大学生から社会人1、2年目くらいの年代で、特に女の子にとっては、それまでの男女平等の学校教育現場から、急に男性優位の社会へ迷い込み混乱しながらも、先輩たちの姿に、「こんなもんか」と自分を納得させ受け入れながらモヤモヤが強くなってくる年代でもある。しかし、学校教育の現場とは異なり、ジェンダーの不平等による暴力が許容される傾向にある日本においては、そのことを学ぶ機会は女性だけでなく、男性にとっても重要な時期であるといえる。

＜対象者の生活や経験とリンクさせた体験的な活動＞

このプログラムは、子どもたちの生活や経験にリンクして展開することで、参加者がより関心を持ち、自分のこととして考えられるようになっている。また、ガールスカウトのように、日頃から関わりのある指導者がプログラムを提供することで、その後の関わりも期待できることが可能であり、年少の子どもたちの場合、このことがプログラムの可能性をさらに広げると考えている。







このプログラムは、仲間と共に体を動かしたり、創作活動やディスカッションなど、さまざまな方法での展開が準備されており、特に年少年代のアクティビティでは、ゲーム的要素を取り入れて親しみやすくする工夫をしている。また、個人ではなく、そこにいる人と関わりながら学びを進めるため、1人ひとり考え方が異なることや、異なっていて良いということを学ぶ。同時に、コミュニケーションのとり方を学ぶことができる。年長者にとっては、女性に対する差別や暴力についての国際的な取組（条約など）や自国の法律や仕組みなども学ぶことができるプログラムになっていることも特徴の1つである。

また、段階的に継続して学べるように、全年代共通で次の6つのステップ

II 実践の展開

でプログラムが組み立てられている。

表1 Voices Against Violence プログラムの6つのステップ

	Step 1 はじめよう 少女と女性に対する差別や暴力に関する活動に取り組むためのウォーミングアップ
	Step 2 考えよう ジェンダーの平等と「自分」について考える
	Step 3 理解しよう 少女や若い女性に対する差別と暴力のさまざまな形態を理解する
	Step 4 力になろう 互いを尊重する関係について理解する
	Step 5 声をあげよう 少女の権利について声をあげる
	Step 6 行動を起こそう 差別と暴力をなくすための行動を起こす

年代グループとプログラムの目標

このプログラムは、全年代で「少女と女性の権利を理解すること」「暴力にあったら支援が受けられること（自分、他者のために助けを求める方法）を知る」「学んだことを人に伝える方法（キャンペーンを始める方法）を学ぶ」ことを共通の目標としている。その上で、年代にあわせ、4つの年代グループに分けて、全世界での取組を前提に考案されている。取り組む国の状況により取り扱われるテーマやアクティビティ、ねらいなど様々である可能性があるが、それぞれの年代のグループにおける主要な目標は次のとおりである。

表2 Voices Against Violence プログラム 主要目標（年代グループ毎）

小学校低学年	自分を大切にすることを学ぶ お友達を大切にすることを学ぶ
小学校高学年	好きなもの、やりたいことは、男の子の子と関係なく誰でも挑戦することができるということを知る 「いや」なことをいやだという方法、安全に逃げる（避ける）方法を知る
中高生	お互いを尊重する人間関係を築くために必要なスキルや考え方を学ぶ 社会にあるジェンダーの不平等について知る
18 - 25歳	社会にあるジェンダーの不平等が原因となって起こる差別や暴力の現状を知る 世界にあるジェンダーの不平等が原因となって起こる差別や暴力の現状を知る 差別や暴力にさらされている人の助けとなる

また、次の8つの種類の暴力を、女性に対する暴力の種類として取り扱っている。「女性性器切除」のように、自分の国では関係がないと思うことも、世界にある少女や女性に対する暴力として知ることが大切であるという考えのもと、このとことに取り組むアクティビティも含まれている。

表3 少女と女性に対する差別と暴力の形態

家庭内暴力	セクシュアル・ハラスメント
性暴力	デートDV
性の対象にされる少女や若い女性	女性性器切除
若年強制結婚	人権侵害としての少女や女性に対する差別と暴力

実施者の育成

VAVプログラムを実施、支援するために、指導者の育成を行っている。育成プログラムでは、指導者自身がジェンダーによる不平等に気づくプログラムに時間を割いている。社会規範に従い生きている大人たちにとって、自身の価値観や固定観念に気づききっかけとなっている。合わせて、このプログラムを実施するときには、指導者自身の個人の価値観に対する良し悪しではなく、次世代に、平等なジェンダー感という価値観を伝えるために、ジェンダーによる社会の固定観念に対する感覚を敏感にし、指導者自身がジェン

Ⅱ 実践の展開

ダー平等の価値観でプログラムを実施することの大切さを伝えている。このため、このプログラムを実施する指導者は、必ずこの研修を受講することとした。また、参加者たちが主体的に、また積極的に自分の意見を表明したり、他者を受け入れる雰囲気を作り出したり、促しができるよう、ファシリテーターとしてプログラムを支援してもらえるよう伝えている。同時に、「子どもの保護と安全に関する成人会員ガイドライン」を策定し、VAVプログラムの支援だけでなく、日ごろの活動においても、子どもたちが安心安全に活動できるようにしている。

併せて、このテーマでは、同世代の仲間からの学び合いは有効であると考えられており、プログラムの中で、学んだことを身の周りの友達などに伝えることを進めている。また、友達に伝えようとすることを応援することも指導者の役割と考えている。18歳から25歳の年代では、同年代の人たちが「リーダー」となってプログラムを進めることも想定している。

高校生年代を対象としたプログラム事例 3泊4日の合宿で

2017年より、高校生の夏期休暇時を利用し、全国の高校生年代30人を対象に3泊4日でVAVプログラムを中心とした合宿を実施している。ここでは、2018年度に実施された内容を報告する。

ねらい

- ・無意識に人の心にある「ジェンダーの意識」が原因となる差別や暴力を知る。
- ・メディアが及ぼす影響を知り、メディアリテラシーを高める。
- ・より良い社会となるよう行動を起こせるようになる。

テーマ 「社会にIMPACTを！壊そうジェンダーの固定観念」

参加者 高校生31人

指導者 20代 1人、30代 1人、40代 2人、50代 1人

ゲストスピーカー 20代 ジェンダーの不平等を感じ、社会を変えるべく活動している実践者

表4 3泊4日の日程

第1日目	ステップ1	はじめよう チームビルディング
	ステップ2	考えよう 男女の仕事、ファッション雑誌
第2日目	ステップ3	理解しよう ニュースを考える
	ステップ4	力になろう 経験者の話
	ステップ5	声をあげよう
	ステップ6	行動を起こそう プロジェクトについて学ぶ
第3日目	ステップ6	行動を起こそう プロジェクトを計画する
第4日目	ステップ6	行動を起こそう プロジェクトについて発表

主なプログラムの概要は次のとおりである。

<男女の仕事>

男女で、つける仕事に差はあるのか。職業を1つひとつ紹介しつつ、その職業は男性のものか女性のものかを問い、男性のものなら右へ、女性のものなら左へ、どちらもの場合は真ん中に分かれるように指示。この場合、ほとんどの職業も真ん中にいる人がほとんどである。ここで、子どもたちに聞きたい職業ラン

キングを見てみる(図1)。男の子の上位は、「学者・博士」「野球選手」「サッカー選手」、女の子の上位は「食べ物屋さん」「看護師さん」「保育園・幼稚園の先生」。男女でこんなにも差があるのはどうしてだろうか、と問いかけてみる。彼らからは、「実際にその

図1 なりたい職業ランキング



出典：第一生命

調査期間は17年7～9月。

全国の未就学児と小学生（1～6年生）1,100人

Ⅱ 実践の展開

職業についている人が、男性（または女性）が多いから（あるいはほとんどいないから）」だとか、「女の子は〇〇に向いているから」などの答えが戻ってきた。では、「なぜ、その職業についている人は男性が多いの」「本当に、女性はずべて〇〇に向いていると言っていいの」などと投げかけると「何か変かも」と気づく。さらに、ある「ストーリー」を聞いて、この「ストーリー」に女性あるいは、男性は何人出てきたか、と聞いてみる。大工と医者のお話である。多くの人は、大工、医者は男性、看護師は女性と無意識に思い込んでいる結果となる。これらから、自分には、無意識に思い込んでいる「男性だからこう」「女性だからこう」というジェンダーによる固定観念があるということに気づく。また、自分がこれまでに受けてきた教育で、「それは男の人の仕事といわれたことがある」という参加者もあり、教育の重要性にあらためて気づいた瞬間でもあった。

＜ファッション雑誌＞

ファッション雑誌を題材に、メディアからのメッセージを感じるアクティビティである。男性誌、女性誌を実際に見比べ、全体のイメージ、取り上げられているテーマ、使われている言葉、色、メイクなどについてグループでの作業で比較する。これらのことを通し、私たちが日々どのくらいメディアから影響を受け、典型的な「男性像」「女性像」という固定観念を植え付けられているかに気づく。

＜経験者の話＞

ゲストスピーカーとして、今年大学を卒業したばかりの女性を招いた。彼女は、高校時代のあるきっかけからジェンダーについて考えるようになり、自ら活動団体を設立し行動に移した人である。問題に気づき、そのことを解決するために行動を起こしている同年代のロールモデルに会うことにより、自分達にもできるかもしれないという影響を受ける。

＜行動を起こすために＞

「ジェンダー」の固定観念について知り、その固定観念を壊すために、社会に対して影響を与える行動をおこす。そのために、プロジェクトの作り方

とその進め方について学ぶ。何が問題で、どう解決すべきかを調べ、整理し、ビジョン、ゴール、目標を設定し、取組を計画する方法を学び、実際に計画した。合宿中には、人に伝えるためのツールとして動画や絵本製作などをチームで行った。そして各自は合宿後に取り組むプロジェクトを計画し、現在取組中である。

3泊4日のプログラム参加前後で意識調査を行った。その結果は、以下の通りである。

図2 暴力を受けたり、見聞きしたら、
どこに行けば支援が得られるかを知っている

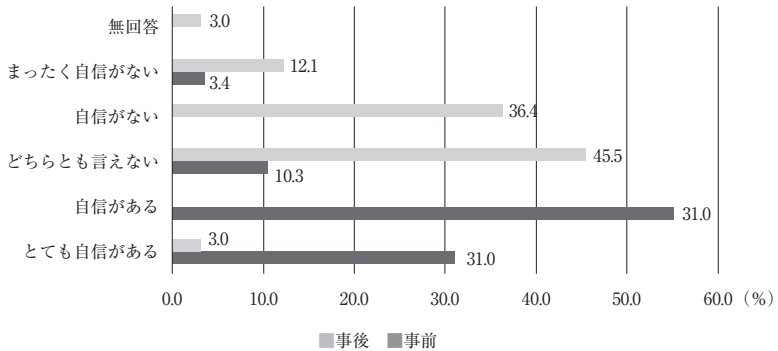
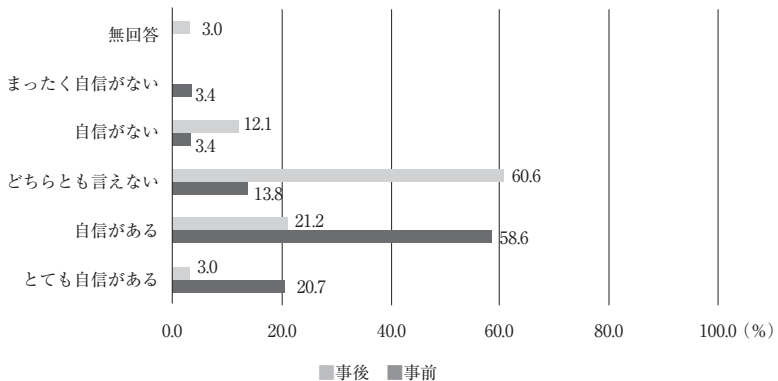


図3 自分の周りで起きている差別や暴力を認識できる



Ⅱ 実践の展開

図4 「ジェンダー」という言葉の理解について

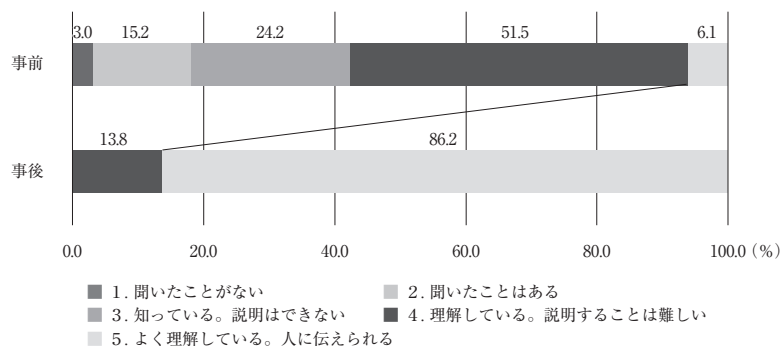
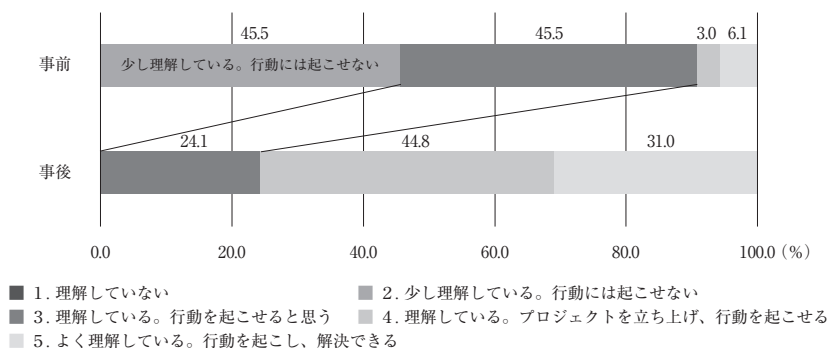


図5 「問題だ」と思うことがあったときの解決方法について



これらの結果は、これまで「ジェンダー」という言葉や、「暴力」について身近に触れたことがなかったことに起因すると考えられるが、裏を返せば、学校教育の中では、これらの内容について触れることが困難であることが推察される。

若者対象プログラム事例 カフェでのイベント

このテーマでの活動で、最大の難関は関心のない人の参加をどのくらい促せるかである。この難関を乗り越えるべく、2017年度に4回シリーズで実施したワークショップの内容を、おしゃれなカフェで、ちょっと立ち寄って

もらうことで、「ジェンダーの固定観念」や「暴力」について考えてもらうイベントを実施した。「暴力防止」の研修というと、無味乾燥な研修室というイメージをやめ、普段はカフェとして営業しているスペースでの開催で変化を試みた。ともすれば、ワークショップに参加すると、受け身になりがちな参加スタイルを、ブースを能動的にまわるスタイルに変えて実施した。

ブースをまわり、そこで考えてもらうというスタイルではあるが、あたかも、他の人もその場において、意見の交流ができるような仕掛けや、ファシリテーターとの対話によって、掲示物だけでは伝えきれないメッセージの補完と参加者1人ひとりに対しての参画の促進がなされた。

名 称：Add your voice Café「もっとわたしらしく～わたしらしく生きるために やめるべきこと はじめること」

参加者：43人 彼女に誘われて参加した男性もいた

内 容：ブース（ワークショップ）、ゲストスピーカー（3人）、カフェコーナー、宣言コーナー

写真4 Add your voice Café 全景



写真5 ブース「危険信号」



<ブース>

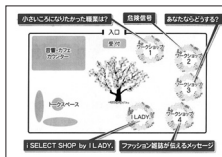
- ・小さい頃になりたかった職業は？
- ・危険信号
- ・あなたならどうする？
- ・ファッション雑誌が伝えるメッセージ
- ・i select shop（公益財団法人ジョイセフ提供）

＜宣言コーナー＞

写真6 宣言コーナー



Add your voice vol.5 Speak out & action
 女性デパートイベント
Add your voice Café
 10/10 Sat. 13:00 ~ 19:00
 2nd floor (ロウフ) 東京市ヶ谷
 主 催 者 東京市ヶ谷女性デパート (主催者代表人/山本さくら) (主催者代表人/山本さくら)
 協 賛 者 東京市ヶ谷女性デパート (協賛者代表人/山本さくら) (協賛者代表人/山本さくら)
 協 賛 者 東京市ヶ谷女性デパート (協賛者代表人/山本さくら) (協賛者代表人/山本さくら)
 協 賛 者 東京市ヶ谷女性デパート (協賛者代表人/山本さくら) (協賛者代表人/山本さくら)



110

改革は、子どもたちのプログラムを推進するためにも重要であると同時に、社会を変革する意味でも非常に重要である。現時点では、2日間の指導者研修を実施しているが、その前段階として入門的要素の強いもの、また2日間の研修後のフォローアップ的要素の強いものなどを2時間程度での研修会を開催し、丁寧に、かつ体験を通しての意識改革を随時進めていこうとしている。

課題：小学生に対するプログラムの実施

教育プログラムとして、小学生年代のプログラムの準備はあるが、指導者たちは、このテーマに取り組むにあたり、十分に自信がなく、その結果どのように取り組んだものかと思案しているとの声も聞かれている。そのことを解消すべく、さまざまな切り口が準備されているこのプログラムをパッケージ化し、実践事例を増やす取組に着手している。

今後の展望：すべての少女と女性一人ひとりが尊重され、よりよい社会にするために声を上げられる社会

私たち世界のガールスカウトは、「すべての少女と女性1人ひとりが尊重され、より良い社会にするために声を上げられる社会」となることを望んでいる。そのために、若い人たちに教育プログラムを届けることは重要であり、それを支援する大人の力が必要であると考えている。と同時に、どんなに小さな子どもであっても、自らの人権に気づいた子どもは、そのことを友達に伝えることもできるし、社会を変える大きなムーブメントを生み出す可能性を持っていることも知っている。暴力防止に向けた取組に若い年代から触れることの意味はここにあり、このことが、誰もが暮らしやすい社会を創ることにつながっていると考えている。

(かたおか・まり 公益社団法人ガールスカウト日本連盟事業統括部長)